

## 刊行にあたって

人や社会のあり方が、それらを取り巻いて生起する世界中のさまざまな出来事によって突き動かされ、方向づけられてきたこと、そしてそのような衝迫イムパクトに対する人や社会のさまざまな反応レスポンスが、人や社会の内実を形づくってきたこと、このことは過去のどの時代についてもいえることである。しかし、それが特に目に見える形をとって現われるのは近代という時代においてである。

幕末・維新时期以降、日本の近代を生きた人々は世界中の政治や経済や文化の動きに否応なく巻き込まれると同時に、それらの動きを取り込んで、自らの主体を形づくってきた。その過程で、「国民」と「国民国家」の形成という一九世紀世界史の基本的な動向が日本列島にも貫徹して、人々を「日本国家」という鑄型の中にながちりと嵌め込はんでいった。それは同時に、人々が「日本国民」という意識を自らのものとして受け入れていく過程でもあった。ただ、この「日本国家」、「日本国民」という枠組みは、沖繩の人々やアイヌ(ウタリ)の人々、そして後には、「在日」を生きることになる人々などに対する差別の構造を深く内包するものであった。

このようなものとしての日本の近代においては、法律や社会制度、社会運動や社会思想、学問や芸術等々、何をとつても、日本に「固有」といえるものは存在しない。それらは、いずれも、「日本の世界史」の現れとして存在しているのである。

それゆえに、私たちはいたるところに、「日本の中の世界史」を見出すことができるはずである。本シリーズの七名の著者たちは、二〇一四年八月以来、数カ月に一度の研究会を積み重ね、政治や経済、文化や芸術、思想や世界史認識など、それぞれの関心領域において、「日本の中の世界史」を「発見」するために、持続的な討論を行ってきた。本シリーズは、その過程で、七名の著者たちがそれぞれの方法で「発見」した「日本の中の世界史」の物語である。

今日、世界中の到る所で、自国本位的な政治姿勢が極端に強まり、それが第二次世界大戦やその後の種々の悲惨な体験を通して学んださまざまな普遍的価値を否定しようとする動きにつながっている。日本では、道徳教育、日の丸・君が代、靖国といった戦前なもの復活・強化から、さらには日本国憲法の基本的理念の否定にまで行き着きかねない政治状況となっている。

私たちは、日本の中に「世界史」を「発見」することによって、日本におけるこのような自国本位的政治姿勢が世界的な動きの一部であることを認識するとともに、それに抗する動きも、世界的関連の中で日本のうちに見出すことができることを確信している。読者のかたがたに、私たちのそのような姿勢を読み取っていただければ幸いである。

二〇一八年一〇月一七日

池田忍、木畑洋一、久保亨、小谷汪之、  
南塚信吾、油井大三郎、吉見義明

# 目次

プロローグ——「連動」する世界史	1
第I章 変革の時代——世界史の中の幕末・維新	9
一 アヘン戦争とヨーロッパの「改革」——緊張はアジアへ	12
1 ヨーロッパの「勢力均衡」のもとでの英米露のアジア進出	12
2 中国の反乱——アヘン戦争とその波紋	23
3 アヘン戦争と日本	30
4 ヨーロッパの「改革」——アヘン戦争の裏で	33
二 ヨーロッパの「一八四八年革命」とアジア	35
——緊張はヨーロッパへ——	
1 ヨーロッパ「諸民族の春」——「一八四八年革命」	35
2 緊張の緩和したアジアへの英米の侵入	37
3 世界全体を意識した対外政策の開始	40
三 クリミア戦争とその裏側のアジア——緊張はクリミアへ	42
1 世界戦争としてのクリミア戦争	42

2	太平天国の乱	44
3	「黒船」——日本の「消極的開国」	46
四	「アジアの大反乱」とその影響——緊張はアジアへ……………	57
1	クリミア戦争後の列強のアジア進出	57
2	「アジアの大反乱」——中国・インド・ベトナム	59
3	「アジアの大反乱」に支援された日本の「積極的開国」	67
4	米露の変革とヨーロッパ——南北戦争と「大改革」と「創業熱」	77
五	ヨーロッパにおける「国民国家」形成とその影響……………	81
	——緊張はヨーロッパへ——	
1	「国民国家」の形成——ヨーロッパの大戦争期	81
2	英露の外交的アジア進出	83
3	世界史の産物としての明治維新	85
	コラム 1 「万国史」の登場	93
第Ⅱ章	「国民国家」の時代——世界史の中の明治国家……………	95
一	ビスマルクの「平和」とアジアの「一八七五年」……………	98
	——緊張はアジアへ——	

1	ヨーロッパ「国民国家」間の均衡とアジア	98
2	日本の「国民国家」形成	101
3	東アジアの「バルカン化」——江華島条約	112
二	露土戦争と「ベルリン条約体制」……	117
	——緊張は中央アジアとアフリカへ——	
1	露土戦争と「ベルリン条約体制」の成立	117
2	「グレート・ゲーム」の展開	121
3	アフリカへの列強進出	123
4	朝鮮の開国と日本のアジア主義	126
5	日本の憲政への道——世界に学ぶ憲法議論	133
三	「西アフリカ」から清仏戦争へ——緊張はアジアへ……	136
1	「先占権」と「実効支配」——ビスマルクの政策転換と西アフリカ・ベルリン会議	136
2	清仏戦争——東南アジアの緊張	140
3	「垂直的アジア主義」と「脱亜論」	143
四	「アフリカ大反乱」とアジア——緊張はアフリカへ……	146
1	ビスマルク最後の「勢力均衡」	146

- 2 「アフリカ大反乱」——「アフリカ分割」と抵抗 147
- 3 東アジアに成立した立憲君主国日本 154

コラム 2 「万国史」の発展 161

第Ⅲ章 帝国主義の時代——世界史の中の日清・日露戦争 …… 163

一 ヨーロッパの「均衡」から日清戦争へ——緊張はアジアへ …… 166

- 1 露仏同盟とシベリア鉄道 166
- 2 日清戦争とその世界的影響 170
- 3 「三国干渉」と「バルカン化」 175

二 南アフリカ戦争から義和団戦争まで …… 180

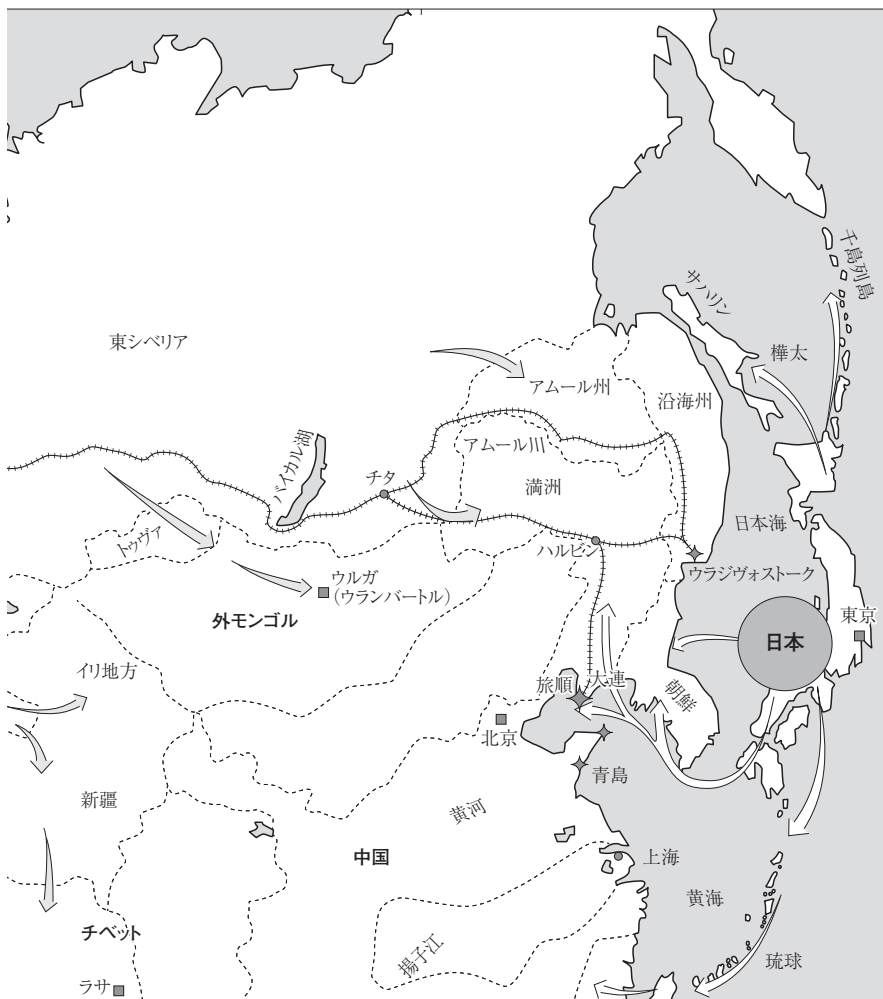
——緊張はアフリカから東アジアへ——

- 1 ファシヨダ事件と南アフリカ戦争 180
- 2 「中国分割」と義和団戦争 185
- 3 日英同盟とその世界史的意義 191

三 ドイツの中東進出と英仏協商——緊張は中東へ …… 194

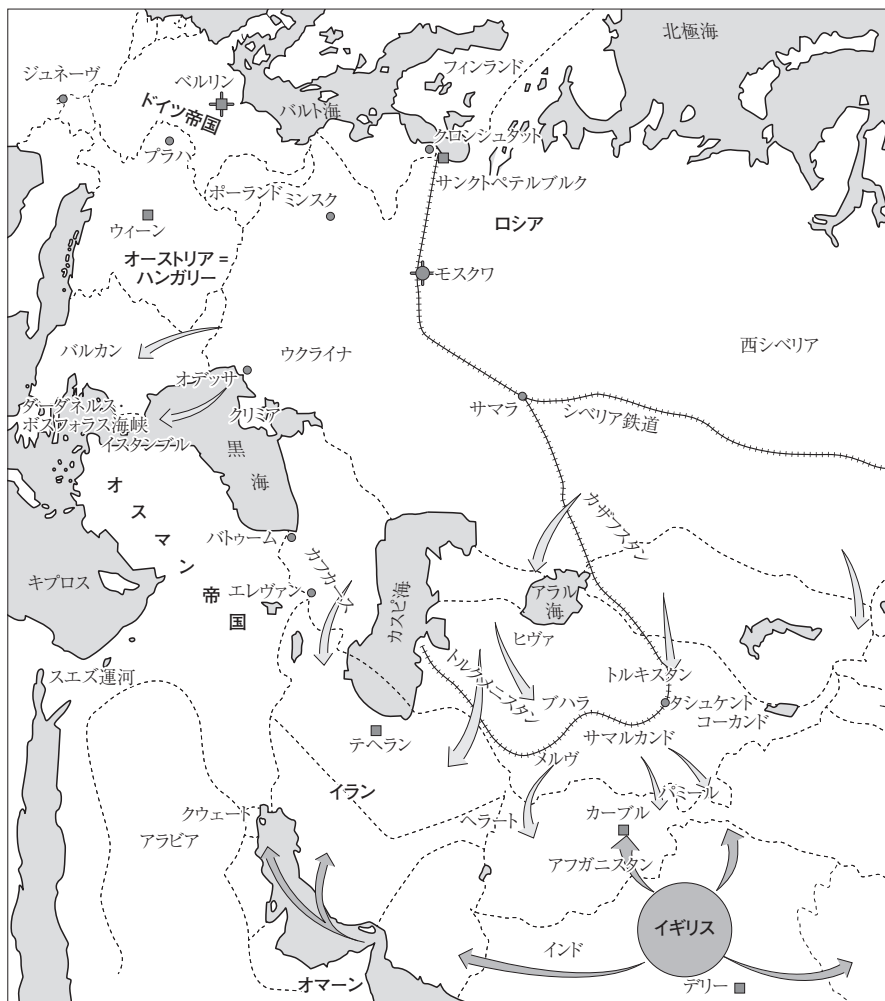
- 1 ドイツの膨張と英仏協商 195

	2	バルカンと東アジア——マケドニアと満洲・朝鮮	199
四		日露戦争の世界——緊張は東アジアへ	203
	1	「代理戦争」としての日露戦争	203
	2	日露戦争からの発信	209
五		ドイツの挑戦と英露協商——緊張は中東へ	214
	1	ドイツの挑戦——モロッコ事件と中東鉄道	214
	2	日本も絡んだ英露協商——「グレート・ゲーム」の終結	217
	3	「連動」する列強の「協商」	220
六		二つの「併合」——緊張はバルカンへ	224
	1	ボスニア・ヘルツェゴヴィナ二州併合	224
	2	韓国併合——二州併合の陰で	228
	3	「万国史」から世界史へ	233
		エピローグ——「土着化」する世界史	235
		文献一覧	239
		あとがき	253



History, vol. 2, Penguin Books, 2003, p. 112 より作成)





1914年以前のユーラシア (The Penguin Atlas of World)

## 凡例

- 一 史料からの引用にあたっては、原則として旧字体を新字体に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改め、カタカナ書きはひらがな書きにした。また、適宜、濁点や句読点を補い、ルビを付した。
- 二 現代語訳(翻刻版)のある史料については、引用に際して現代語訳(翻刻版)を用いた。
- 三 引用文中の「」は引用者が加えた説明である。
- 四 \*を付した語の説明を、当該段落直後に記した。
- 五 引用文の出典や本文の典拠などを示す際には、原則として、「相澤、二〇一〇」のように著者名と刊行年を略記し、その文献名等は巻末の文献一覧に表示した。
- 六 引用の史料中に「支那」など、今日使われない言葉があるが、原文を尊重してそのまま用いた。

## プロローグ——「連動」する世界史

幕末に活躍した坂本龍馬は、明治国家の形成に向けて「船中八策」を提案したことで知られている。かれはこれを突然のひらめきで思いついたのだろうか。いやけっしてそうではあるまい。かれはかれなりに諸外国の先例を学び、それを背後に日本のあるべき姿を考えたに違いない。事実、かれは、すでに箕作省吾の『新製輿地全図』、斎藤竹堂の『鴉片始末』、長山樗園の『西洋小史』などの海外事情を記した書物を目にしていたようであり、また諸外国の動きを知る勝海舟や高杉晋作らから海外事情を学んでいたことが知られている〔岩下・小美濃編、二〇一〇、七四―七五、八三―八八頁〕。このような坂本龍馬の動きは「日本史」の問題なのであろうか。一般にはおそらくそうであろう。そして坂本が諸外国の動静に通じていたことは、「日本史」にとつての「外的契機」「国際環境」などとして扱われることになるであろう。しかし、これは歴史を「日本史」「世界史」と分けて見る枠組みに従って見た結果にすぎない。こういう区分をしないで歴史を考えるならば、坂本の知見は世界の歴史の一部分なのである。世界の歴史が日本という場所で、坂本を通して展開し「土着化」しているのである。では、このように「日本史」と「世界史」に区別して歴史を考えないとするならば、どのように世界の歴史を考えればいいのかだろうか。本書で採るのは、世界の諸地域の諸「関係」に注目して考察す

る見方である。本シリーズの執筆者の一人、小谷汪之ひろゆきの言うように、「いかなる社会、民族、国家の歴史にしろ、けっして孤立してもっぱら内在的に発展してきたわけではなく、他の社会、民族、国家とのあいだにさまざまな関係をとり結び、それによってさまざまな作用を受けながら発展してきた」のである。「この社会、民族、国家間の相互作用を、外的要因として捨象し、それぞれの社会、民族、国家の内在するものとしてのみ発展」を考える方法は、「日本史」と「世界史」を区分する見方の基礎なのである「小谷、一九八五、六二―六三頁」。では、ここで言われる「さまざまな関係」「さまざまな作用」を、どのように具体的に考えたいのだろうか。

本書は、「関係」の視座から世界史を考える方法として、国際関係史を基礎にして世界史を考える道を選んでいる。本書は、「一八四〇年」から「一九一〇年」までの「一九世紀」の世界を扱うが、広い意味で帝国主義の時代と言ってよいその時代には、世界の諸地域が文字通り有機的なつながりを持った世界史が形成されている。そして、国際関係の面でいえば、あたかも「ゴム風船」のように、世界のどこかの部分で緊張が高まれば、ほかの部分で緊張が緩和され、そしてどこかで緊張が緩めば、必ず他の部分で緊張が高まるといった「関係」が展開されていることを見ることができ。これは歴史家の江口朴郎が「第一次世界大戦前史概説」江口他、一九四九において示していた見方である。その後江口は帝国主義論としてこの議論を進展させ、権力の国際関係に民衆運動を加えて考えた。それに倣なまって考えるならば、民衆運動は、列強の権力政治に抵抗しその鎮圧の対象となったり、在地権力を脅かし動揺させて列強対立を呼び込んだり、列強の対立を妥協させる脅威となったり、権力政治の動きを抑制、牽制したりして、列強の国際関係に影響を与えていた。それはますます「ゴム風船」的

な「関係」を規定していた。

本書はさらに、そのような「関係」の中で、世界の諸地域の歴史が「連動」するととらえている。「連動」とは、諸地域が一定の「関係」のもとで何らかの「相互作用」「さまざまな作用」を受けつつそこでの歴史を展開するという事態を言っている。世界の諸地域は、相互の「関係」の中で、時々の世界の基本的ないしは指導的「傾向」といったものを受けとる。この世界史の時々時代の支配的「傾向」[Tendenzen]というのは一九世紀ドイツの歴史家ランケがその『世界史』において用いた概念である。ランケは君主制や人民主権などを念頭に置いていた「ランケ、一九九八、一七、二四五、二四八頁」。そういう世界史の「傾向」に「反発」したり「受容」したりして、世界の諸地域は、その「傾向」を何らかのかたちで「土着化」していく。このような過程を通して、ある地域の歴史が他の地域の歴史と「連動」するのである。したがって、緊張が移動するその移動先をのみ追いかけるのではなく、緊張の緩和したところ、緊張の渦の外での歴史の展開を見ることが大切である。

このような「関係」と「連動」という見方に立つと、どの地域が「先進」的で、どこが「後進」的かということは問題ではなくなってくる。相互の「関係」の中で、世界のどこかに「先進」的なものが存在すると、他の地域では同じものは成立しないのである。同じように、従来のような「ヨーロッパ」対「アジア」という対立思考も、これまでの世界史がヨーロッパ中心であったから今度はアジアから見るといった思考も、取ることはできなくなる。一般的に、世界史の中でどこかに「中心」を置くという見方はとれなくなるのである[江口、一九七五、二八―二九頁]。

では、世界諸地域の「関係」と「連動」の中で、幕末・維新から日露戦争までの日本の歴史をどう

とらえるか。これまで外国史を研究してきた者の目から、この点を考えるのが、本書のもうひとつの狙いである。

すでに一九五〇年代に歴史家の石井孝はその『明治維新の国際的環境』において、幕末・維新期の日本の政策決定に英仏ら列強の対日政策が与えた影響を分析し、明治維新における「国際的契機」に大きな意義を見出していた「石井、一九五七」。一九六〇年代には歴史家の遠山茂樹と芝原拓自のあいだで、明治期日本の発展における外的契機の意義をめぐる論争が行われた。遠山は、「一八六四年の太平洋の乱鎮圧、四国連合艦隊長州攻撃から以後、八四年の清仏戦争に至る間の約二〇年間は、東アジアでの直接的な外圧は、相対的にゆるんでいる」とした。その理由を、「インド大反乱(セポイの反乱)や太平天国の乱に代表されるアジア諸民族の抵抗の影響、欧米資本主義国内における民衆の政治的発言力の強化のほか、列強対立の主舞台が、ヨーロッパ内部、バルカン、中近東にあり、植民地獲得の主方向は、日・中・朝三国の外側周辺のアジア地帯およびアフリカにあったことに求めた。これに対して、芝原は、種々の批判を加えたが、基本的には、「直接」的外圧を強調すると、そうでない「平和」的圧力の意義を正しく評価できなくなるということであつた「幼方他、一九六六、二五、五二頁」。

一九八〇年代に入って、議論はより大きな視野で再開された。歴史家の加藤祐三は、『黒船前後の世界』で、この時期の日本を取り巻く世界史(加藤においては、世界史は外国史を意味する)を考えるうえで、従来の見方が、「中国と日本とを分けて考察し」たり、「欧米を軸にして日本ないし中国を考察し」たものであると批判し、この時期の世界を「同時代史として」考察することが必要であるとして、

幕末開国史の研究において「日本」中国（広くはアジア）「欧米」という三者の「関係」史」を組み込むことを提案した「加藤、一九八五、三三六―四四頁」。これに答えるかのように、歴史家の宮地正人は、国際政治に対応する過程がいかに関内政治の基本動向を決定してきたかを強調して日本史を再構成した「宮地、一九八七、三頁」。その後、日本史にとつての国際関係の意味や、日本史と世界史の関連を意識して、歴史家の井上勝生や三谷博や青山忠正や横山伊徳らが新しい議論を展開してきている。たとえば青山は、宮地を受けて、外交と内政の連動を主張してこう述べている。「外交と内政は、常に連動する。つまり、外交上の問題が、文字通り外国との交渉だけで完結することは、一般的に見てもない。それは、必ず国内の諸党派間で、方針の相違をめぐって内政に波及する」（青山、二〇一二、六九頁）。

本書では、これらの観点は、大いに活用させてもらうが、もう少し「日本史」という国民史の枠組みを崩してみたい。一般に「外圧」「外的契機」と言われるものは、実は世界史の展開過程の現れなのではないか、日本の歴史も世界の歴史の動きの一部として展開されているのであって、その現れが「外的契機」などと受け止められているのではないかと問うてみたい。「日本史」に「外的契機」として現れるものは、世界史の時々「傾向」が日本という場で「土着化」する事態だと言えないであらうか。「関係」を通じて世界史の「傾向」が日本という地に展開し、世界の他の地域と日本という地の歴史が「連動」するのである。これは、「日本の中の世界史・世界史の中の日本」という視角なのである。

一九世紀後半の日本の歴史は、世界的な権力関係の渦の、あるときにはその周縁における、あるときにはその中心における、時々状況を活用して展開され、その状況の中で世界史の「傾向」を、そ

の問題をも含めて、吸収し、その取捨選択の結果、それらを「土着化」させて、あのような明治国家を作ったのである。思想史家の子安宣邦が、「日本の近代化とはヨーロッパに発する「世界秩序」あるいは「世界史」へのみずからの組み入れを意味する」と言うとき、こういう視角が念頭に置かれているのであろう〔子安、二〇〇三、二八頁〕。

\* \* \*

本書の時期区分は以下のとおりである。

第一章 変革の時代——世界史の中の幕末・維新 一八四〇—一八七五年

第二章 「国民国家」の時代——世界史の中の明治国家 一八七五—一八九〇年

第三章 帝国主義の時代——世界史の中の日清・日露戦争 一八九〇—一九一〇年

大まかに言って、一八四〇—一八七五年の時期は、自然発生的な諸事件の動きが「連動」しあっている時代であり、一八七五—一八九〇年の時期は、強力な個性を持つリーダーが「国民国家」の力を動員しつつ行う政策的なイニシアティブが、諸事件の「連動」をもたらす時代であった。一八九〇—一九一〇年の時期は、狭い意味での帝国主義の時代で、列強の動きが民衆運動との関係で大きく左右され、その結果、世界的な諸事件の「連動」が生まれる時代である。

本書は、何らかの新しい史料に基づいて歴史を描くものではない。既存の歴史書を基礎にしている。狙いはどのようにして「日本史」と「世界史」を区別しない世界史の全体像を描くかを提示することにある。それを「関係」と「連動」という視角から試みたものである。だから、外国史も多くは日本

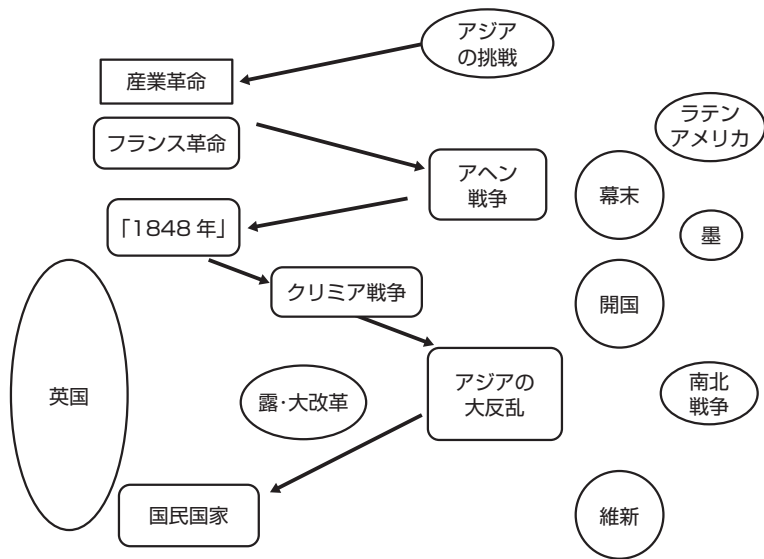


との直接・間接の「関係」を念頭に置いて見ている。また日本の歴史もそれが世界史の「連動」の一部だということを強く意識しながら検討している。言い換えれば、従来の歴史的事実を新しい視角で見直す、ということと言えるのかを示すことになる。従来の歴史記述で無視されていたり、マイナーな扱いを受けていたり、中途半端に扱われていたりする事実、新しい意味を与えていくという作業が中心となるはずである。本書は世界各地を舞台にして、多分に仮説的な議論を行っており、種々の誤解を犯しているかもしれない。多方面からのご批判ご教示をいただければ幸いである。

第I章

---

変革の時代——世界史の中の幕末・維新



《本章のアウトライン》

一八四〇年代の世界の緊張関係は西欧のアジアへの進出に対する反発としてのアヘン戦争に集約されるが、一方でその反面として、ヨーロッパでの緊張緩和が生じ、そこに種々の改革が可能となる。しかし改革の結果としての一八四八年革命において緊張関係はヨーロッパへ移行し、アジアでは緊張は後退する。一八四八年革命の鎮静とともに新たな緊張関係がクリミア戦争として高まるが、その間にも続くアジアにおける緊張緩和の間に、太平天国の乱がおこり、「黒船」が日本へ到来し、日本は消極的な「開港」を行う。クリミア戦争が終結するやいなや、列強のアジア進出が本格化し、その結果一八五六―六八年の間にインド、中国、ベトナムにおいて、いわば「アジアの大反乱」といふべき緊張関係が生じる。この大反乱の間に、日本の積極的な「開国」、南北戦争、ロシアの「大改革」が起こる。しかもこの大反乱のかげで、ヨーロッパでは経済のブームが可能となり、「国民国家」の下地が準備される。その結果、一八六四―七〇年に起こる諸戦争によって、ヨーロッパの「国民国家」が形成される。そして、そのヨーロッパの緊張関係の陰で、緊張の緩和されたアジアにおいて、明治維新が実現される。

## 一 アヘン戦争とヨーロッパの「改革」——緊張はアジアへ

### 1 ヨーロッパの「勢力均衡」のもとでの英米露のアジア進出

#### 「勢力均衡」

明治の初めに出た洋学者箕作麟祥みづくりあきよしによる『万国新史』(二八七一—七七年)は、フランス革命とウィーン会議後の「万国史」を語るに際し、アジアにおける英露の対立から始めている。英露のインド、イラン、ヘラート、アフガンをめぐる競争を述べ、そして最後にアヘン戦争について詳述している。「箕作、二〇一八、二〇七—二一七頁」。箕作は、ヨーロッパの激動が終わったあとに、英露に代表される列強の対立の渦が次第にアジアに移動してきている様子をつかんでいたのである。箕作の『万国新史』以後、後述する二〇世紀はじめの坂本健一や高桑駒吉らの『世界史』に至るまで、西アジアや中央アジアの歴史はほとんど扱われてこない中で、この本はユニークであった。これによって、ヨーロッパと東洋がつながりで考えられるようになったのである。このアジアをめぐる英露の対立は、やがて世紀末には一般に「グレート・ゲーム」と称されることになる。これは列強の勝手な命名であるが、列強の視線を表現しているもので、ここではそういうものとして借用したい。

さて、英露のアジア進出はヨーロッパの国際関係における安定によって可能になった。ヨーロッパ

では、ナポレオン戦争後の国際秩序回復を目指した一八一四―一五年のウィーン会議の後、民族（ネーション）の自立と人民の自由を求める革命が各地に起こった。一八二〇年代にはスペイン、イタリア、ギリシアなど地中海周辺で諸革命が起きて、それはラテンアメリカにも及んだ。しかし、一八三〇年のフランス七月革命、ベルギーの独立、ポーランド蜂起をもって革命の時代はおさまり、列強の君主たちの連合によって「ウィーン体制」と言われるものがつくられた〔Hobsbawm, 1975, pp. 138-141〕。従来の君主体制が復活して、革命運動は抑圧され、列強間の問題の外交的解決が図られ、イギリスの圧倒的な軍事・経済力のもとでの列強間の「勢力均衡（バランス・オブ・パワー）」が生み出された。それはヨーロッパ諸国で起きた一八四八年革命までは継続した。こうして、ヨーロッパ内部の国際関係において、当面大きな戦争が起こる気配はなくなったのである〔Ibid., pp. 133-135〕。

このヨーロッパにおける緊張の緩和の間に、英露はヨーロッパの外へと勢力を拡大することができた。一八四八年までのヨーロッパでは、工業化された資本主義国は産業革命を経たイギリスのみで、イギリスだけが真にグローバルな政策、グローバルな海軍を持っていた。これに対抗できるのは、革命と戦争後の衰退にあるフランスを除けば、強い陸軍を持つロシアだけであった。イギリスもロシアも、その東方への進出は他の列強によって牽制される恐れはなかった〔Ibid., pp. 100-101, 134〕。

産業革命を進めてきたイギリスは、自国産業の市場を求めて、ラテンアメリカや北アフリカ、アジアへ進出したが、一八三〇年代までは、領土的拡張という面ではまだ限定的であり、世界的規模での海軍の展開と貿易の発展にとって重要な拠点を占領することで満足していた。その拠点は、ケープ、セイロン、シンガポール、香港などであった。占領という行政的な負担なしに世界的な貿易を展開し

ようとしていたのである(非公式帝国主義と言われる)。しかし、すでに一八世紀中ごろからイギリス東インド会社が植民地化を進めているインドは例外であった。インド市場は巨大であり、インドは東アジアへの突破口であって、ここは公式帝国主義の対象であった[Har. p. 136]。イギリスは、インドまでのルートの確保のために、ロシアと微妙に接しつつ、オスマン帝国、イラン、アフガニスタンなどを支配下に置こうとした。箕作『万国新史』にならって英露の「あい競う」さまを見ていこう。

### オスマン帝国

オスマン帝国は、一八二〇年代にはギリシアの、三〇年代はセルビアとエジプトの、「不羈<sup>ふき</sup>独立」を求める民族運動に動揺していた。ロシアは同帝国の解体を求め、イギリスはその保全を求めつつ、それぞれの立場から介入した。一八二一年に始まったギリシア独立戦争は、オスマン帝国の属州エジプトの応援を得たオスマン帝国と、英仏露に支援されるギリシアが戦い、ギリシアが勝利を得て、一八二九年のアドリアノーブル条約によって、ギリシアの自治国としての独立が認められた。また、セルビアは一八三〇年にロシアの保護のもとに独立した[箕作、二〇一八、一七二—二一五頁]。その後、オスマン帝国はイギリスの経済的進出を受け、一八三八年には通商条約(バルタ・リマン条約)を結ばされた。これにより帝国は、それまで非ムスリムに与えてきた身体・財産の安全など通商上の特権を確認し、関税自主権を放棄し、治外法権を与え、イギリス企業の自由な活動を認めた。これはその後各地に拡がる不平等条約のはじまりであった。

このような自由市場化に対応すべく、オスマン帝国は一八三九年に「ギュルハネの勅令」によって

## 1 アヘン戦争とヨーロッパの「改革」

タンズイマート改革を開始した。それは、軍事改革と官僚制の整備のほか、宗教を問わない法の前の平等、生命・名誉・財産の保証などにより、この時代の世界の自由主義の「傾向」を導入し、近代法治国家へと編成替えしようという措置であった〔世界史史料8、二〇〇—二二二頁〕〔加藤、一九九五、二〇六—二〇七頁〕。帝国は、内外の危機に直面していち早く国内の改革を進めたのだった。

三〇年代にはオスマン帝国は、エジプトによる反乱に直面した。エジプトではムハンマド・アリーがほとんど自立的な権力を打ち立てて、近代化を進めていた。箕作によれば、アリーは「エジプトの地を私有し、擅制の政を境内に施して、国権その一人に帰し、ひとり国内製造工作の利を占め、ことにその人民を強い、これを兵籍に編入し」ていた〔箕作、二〇一八、一七二頁〕。これは「非西欧世界が迫り来る西欧列強の進出の中で、自立的な近代国家建設を目指した最も早い試みの一つ」であって、「早すぎた明治維新」ともいわれる〔加藤、一九九八、一七二頁〕。そのエジプトは、ギリシア独立戦争において、オスマン帝国のために派兵した際に約束された領土を求めてスーダンを支配し、一八三一年には同帝国内のシリアの行政権を要求して「第一次シリア戦争」を引き起こし、さらに一八三九年に「第二次シリア戦争」によって帝国を破って、シリアを領有しようとしたのである。

これにイギリスなど列強が介入し、一八四〇年には、イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセンの参加するロンドン四カ国条約が結ばれた。同条約は、ムハンマド・アリーのエジプト世襲支配を認める一方、スーダン以外の征服地を放棄させ、さらにバルタ・リマン条約の適用を規定した。これによって、帝国が認めた関税などは、そのままエジプトにも適用されることになり、エジプトは経済的な打撃を受けることになった〔世界史史料8、一一三—一一五、一五三頁〕〔佐藤編、二〇〇二、四〇二頁〕。



だが、この種の条約は次第に「東へ」向かって来るのである。以後、西欧列強は、オスマン帝国との接触で学んだ外交の術を「東へ」適用していくのである。それを知ってか、箕作『万国新史』は、エジプトやオスマン帝国が列強の思惑に翻弄されるさまを詳しく記述していたのである〔箕作、二〇一八、二二七—二二三頁〕。

この時期のオスマン帝国支配下からの諸民族の独立をめぐる足の引つ張り合いを、本書では「バルカン化」\*として注目していく。本来ならば、手を取り合って同帝国からの独立を目指してもよいはずのギリシアとエジプトが、独立戦争を始めたギリシアに対して、エジプトが帝国の側についてこれを攻撃し、自らの地位の上昇を目指すという関係に立ったのである。これは日本を含むアジアにおいてもこののちに見られることになるはずである。

\*今日ではこの「バルカン化」という言葉は、「小国への分裂」といった意味で使われるが、これは一九九一年以後のユーゴスラヴィア解体から使われ始めた新しい用法である。本書の用法は、『バルカン史』〔柴編、一九九八、二一—二三頁〕に見られる、バルカン諸国が「相互に対立や抗争を展開する」状況を「バルカン化」とする用法を、発展させたものである。

## 西・南アジア

オスマン帝国の隣のガージャール朝イランでは英露の争いはより顕著であった。ロシアは、一九世紀初頭以後、グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンなどザカフカース(南カフカース)を支配下に置き、一八一〇年代からは北カフカースへの進出を進めていた。英露の「東」への進出に注目してい

た箕作『万国新史』は、このカフカース以東へのロシアの進出について詳しく述べ、一八二八年にロシアがイランに勝利して、「トルコマンチャリーに和議を結び」、「ペルシア(イラン)を震盪し、トルコを威脅して、小アジアよりコンスタンティノープルに迫るべき勢いを示し」たという。そのうえで、イランをめぐる英露の争いについて、「往時特に盛大を極め、覇をアジア洲中の南方に称せし一國」であったイランは、「イギリス、ロシアの二國たがいにあい争うの地たるに至り」、「近歳その勢いようやく衰頹し」て、トルコマンチャリー条約によつてロシアの内政干渉を受け、さらに峻されて「ペルシアとアフガニスタンの間にありて、すこぶる要害の地たる」ヘラートを攻撃したが、ヘラートをめぐる英露の対立に巻き込まれてしまったことを指摘していた〔箕作、二〇一八、二二〇、二二三頁〕。ここで箕作の指摘するトルコマンチャリー条約は、きわめて重要なもので、イランが初めて治外法権を明文で認め、関税の自主権を失うことを規定した不平等条約であつて、イギリスも一八四一年に同様の通商条約を結ぶことになる。前述のバルタ・リマン条約とともに、この種の条約がつぎつぎと「東へ」と拡げられていくのである。このような英露のイラン進出はイラン住民の反発を受けざるを得ず、やがて一八四八年にはシリア派イスラームの一分派であるバーブ教徒の反乱を招くことになる〔世界史史料 8、二〇七—二一〇頁〕〔永田編、二〇〇二、三三九—三四一頁〕。

イランの北にある中央アジアのトルキスタンには、イスラームを受容したウズベク人のコーカンド、ブハラ、ヒヴァの三つのハーン国が併存していた。そこへ一九世紀のころにロシアが進出してきた。箕作は、ロシア人は「トルケスタンを略し、その有に帰する時は、ウラル嶺よりアジアの中心に至る捷徑(近道)にして、その国のため便なるを思い、常にその土人を征服せんと欲せし」と見ていた〔箕

作、二〇一八、二二一頁」。はたして、ロシアは、一八三九年冬に、多数のロシア人奴隸を持つヒヴァへの遠征を行った。ロシアは、抵抗を受けて苦戦を余儀なくされたが、いずれヒヴァをめぐってイギリスと勢力を接するに至るのである〔小松編、二〇〇〇、三三二—三三三頁〕〔加納、二〇一二、一八四—一八七頁〕。

イギリスは、イランに続きアフガニスタンの支配を狙った。箕作は、イギリスは「カブルの地を略しこれをその統轄に帰せざる時は、インドの領地その虞おそれなきを保するあたわざるがゆえに、ついにカブルの内事に干渉せんと欲し」と、正しく見ていた。そして、一八三九年、イギリス東インド会社はインダス川を渡り、八月にはカブルを降した。だが、「アフガニスタン人はイギリス人に覇制せらるるを悦ばず」、一八四二年一月イギリス人を襲い、イギリス人は「その勢い衆寡あい敵せず、ついに降伏を記して約を結び、一時和平を得るに至」った〔箕作、二〇一八、二一四頁〕。箕作の指摘するように、イギリスは、ロシアの来る以前にアフガニスタンを狙うも、抵抗を受けて苦戦をしなければならなかったのである。

箕作はインドへのイギリスの進出をも克明に記述していた。「初めイギリスのインドにある領地は、東インド公司(イースト・インディア・コムペニー)と号する商估しょうこうの社中、本国政府の管轄を受け、これを統制せしが、ようやくに近隣の小邦を侵略し、その地を合併」した。イギリスは、ナポレオン戦争の間にマラーター王国と戦って、デリー、アグラ、カルカッタなどを支配した。マラーター王国は一八一五年より一八一八年までイギリスに抗して戦ったものの敗れ、結局、「インドの全国、南はコモリン(哥摩令)岬より北はヒマラヤの高嶺に至るまで、一億六千万余の人民」が、「挙げてイギリスの駕が